

大正

大正9年、ついに100万石達成!

明治後期以降は、農政面でも小作農農場の成立を促した「北海道国有未開地処分法」や、技術者を派遣し工事費を補助する「北海道土功組合法」の制定、明治32年の北海道拓殖銀行の設立によって資金融通の道が拓けたことなどから、稲作は全道に広がっていきました。

その結果、明治19年にわずか29,000石だった収穫高は、大正9年には100万石を超える1,190,107石を記録しました。



昭和

収穫量日本一達成も、減反の時代へ

冷害、戦争、復興と昭和は、北海道稲作にとっても激動の時代でした。戦後再び北海道に水田が増え始めたのは昭和24年頃から。昭和36年には作付面積が20万ヘクタール、新潟県を抜き初の収穫量日本一に。

ところが、人々の食生活の変化から米の消費量が減り、生産と需要に著しいギャップが生じます。国の減反政策により、ピーク時は最大266,200ヘクタールあった作付面積が、昭和48年には45%減の145,300ヘクタールまで落ち込んだのです。



平成

美味しさを求め、選ばれるお米へ

北海道は食味の優れた品種開発に力を入れ、「きらら397」を皮切りに、「ほしのゆめ」「ななつぼし」など、多くの品種を生み出しました。平成17年からは食べているお米を北海道米に変えようと呼びかける「米チェン!」運動を開始。平成21年には「ゆめぴりか」が本格デビューし、主要コンビニ・スーパーとの連携による消費拡大キャンペーン「北海道、ごはん道?」の展開などにより、北海道米は道民から愛されるお米となっていったのです。



北海道米物語

不向きと言われた稲作。幾多の苦境を乗り越え発展した日本の米どころ、北海道のストーリー。

江戸

時は元禄、始まりは道南

北斗市にある「水田発祥の地碑」には、「元禄五年、作右衛門なる者四百五十坪を開田し、産米十俵を収穫。北海道産米三百万石の基礎はこうして発祥した」と記されています。

北海道の稲作の起源は、この石碑の記述を含めたいくつかの説がありますが、この頃から上磯町や江差町など、北海道の中でも温暖な道南で試作をしていたようです。幾度も水田開発計画を試みては、凶作に遭い中止され、その繰り返しの途中で少しずつ稲作の土台はでき上がっていきました。



水田発祥の地碑

明治

稲作への情熱が、水田を大きくした

開拓顧問のホーレス・ケブロン氏は、稲作ではなく畜産を軸とする産業政策をとりました。当時の有識者は、気候条件などから稲作に否定的だったのです。

しかし、農民の米への愛着は強く、それを象徴するのが北海道稲作の父と呼ばれる中山久蔵です。中山久蔵は、道南の大野村で栽培していた品種「赤毛」を仕入れ、札幌郡島松(現・恵庭市)で10アールの水田を始めました。冷水を温めて水路に入れるなどの工夫をし、数年後には1ヘクタールの水田を作ることに成功したのです。

北海道稲作の父
中山久蔵

島松で成功した中山久蔵は、その後も研究開発を続け、改良品種の普及や農民への指導に尽力し、多大な功績を残しました。



【資料提供】北広島市教育委員会

黒田式直播機の登場

中山久蔵の成功に加え、移民の増加や米価の高騰から、明治中期以降、政府は稲作に積極的になりました。各地の試験場で技術が研究され、田に直接種を蒔く「直播栽培」が推奨される中で「黒田式直播機」が登場しました。

末武安次郎と黒田梅太郎によるこの発明は、16本の管から一度に幾つもの種子を蒔くことができたことから俗に「タコ足」と呼ばれ、栽培の労力を大幅に節約できることから、多くの農家に取り入れられ、直播栽培の普及に大きな功績を残しました。

Check!

農薬半分以下、特別栽培米への挑戦

より安心なお米を追求して、農家とともに米の栽培から関わるお米屋さんがあります。北斗市の澤田米穀店が挑むのは、農薬や化学肥料を一般の半分以下に抑えて栽培する「特別栽培米」の生産です。いいお米を選んで売る米屋から、

う一步踏み込んだ価値を提供したい。全ては、安心なお米を食卓に届けるため。その想いに共鳴した市内の幾つかの農家と契約を結び、2015年からその取り組みは始まりました。手間はかかるけれど、その稲穂には他にはない格別の情熱がこめられています。



澤田米穀店

所/北斗市中央2-3-1
☎/0138-73-2210
営/8:30~19:00 休/日曜日・祝日

【参考文献】北海道の米 北海道産米百万石祝賀会 大正10年文栄堂印刷所発行、日本の米づくり 根本博著 2015年岩崎書店発行、北海道の稲作 水野直治著 平成4年北海道協同組合通信社、北海道の稲作 星野達三編集 平成6年財団法人北農会発行、北海道米LOVEホームページ

農耕具ヒストリー

高性能のコンバインが田んぼを走り回る今日までの間、それぞれの時代に、農民と二人三脚で活躍した農耕具があります。

千歯扱き

その名の通り、たくさんの歯の隙間に穂を入れ脱穀する道具です。元禄年間に発明され、約200年もの間広く活用されました。



【資料提供】北海道博物館所蔵

足踏み脱穀機

大正時代に普及した回転式の脱穀機。扱胴(こきどう)に逆V字型の針金を付け、踏み板を踏んで扱胴を回転させて脱穀します。



動力脱穀機

昭和40年代頃まで使用された足踏み脱穀機の進化系。石油発動機による回転で労力を大幅に削減しました。

